
フォーゼ・オーズ・ゴーカイジャーfeatゴセイジャー オールヒーロー大決戦

赤城 聰真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォーゼ・オーズ・ゴーカイジャーfeatゴセイジャー

オールヒーロー大決戦

【ZPDF】

Z0504Z

【作者名】

赤城 聰真

【あらすじ】

大ショッカーが世界を征服しようと襲撃にやつて来た。それを阻止すべくすべての平成ライダーが集まつた。結果、大切な物を失うというかたちでライダー側の勝利に終わつた。

数年後、新たな仮面ライダー、フォーゼが生まれその物語が進んでいくはずだった。しかし、倒されたはずの大ショッカーが『ショッカー帝国』として蘇り再び世界を我が物にしようとする。フォーゼはライダーとして戦おうとする。そして、その戦いはあの『豪快な

奴ら『』までをも巻き込む大事件へと発展していく！
世界を守るために全てのライダーと全てのスーパー戦隊が集結する！
はたして世界の運命は！？

プロローグ（前書き）

初小説です！文章力はまったくありませんが頑張っていきたいと思います。

ちなみに今回はスーパー戦隊は登場しません。
次回から出来るだけだせるようにしますのでどうかご理解を！

プロローグ

――とある世界――

今、この世界で起きていることはまさに…戦争だつた。全世界の悪が大団結した秘密結社『大ショッカー』が地球を征服しようと襲撃してきたのだ。

「キャー！」

「に、逃げろ！」

戦う力ない人々はただ逃げるしかなかつた。

「ハツハツハツ、愚かな人間共が！今更何処に逃げても遅いというのに。もうすぐ我等大ショッカーがこの世界を征服し地球で最も迷惑な存在となつてやるのだ！」

大ショッカーの幹部アポロガイストが高らかに笑う。「さあ行け！シヨツカ―戦闘員！人間共に目にものを見せてやれ！」

「「「イー！」」

アポロガイストの命令でシヨツカ―戦闘員たちは逃げ惑う人々に襲い掛かるつとする。

その時、

「待て！」

何処からか声が聞こえシヨツカ―戦闘員たちや怪人たちの動きが止まる。

怪人たちが声のしたほうを振り向くと「コッテに向かつて何かが飛んで来る。その何かが地面に落ちた瞬間、ドカーン！

と、爆発が起こる。

突然起きた爆発で土煙が舞う。何が起きたのかわからない怪人たち

は混乱するなか、アポロガイストは何も言わずただ土煙の方を見ていた。その先にいくつかの人影が見える。その数は何十人、嫌々何百人といふ。その何百人という人影は豪快なバイクのエンジン音を響かせながら大ショッカーの怪人たちに向かつて行つた。

そして、その人影が土煙から姿を現した。その姿は様々だった。クワガタの様な仮面の戦士、龍の様な仮面の戦士、鬼の様な仮面の戦士、カブトムシの様な仮面の戦士、コウモリの様な仮面の戦士、体の左右が黒と緑に分かれた仮面の戦士、体の頭、胸、足と三等分された仮面の戦士など他にも大勢いる。「来たか…」

アポロガイストは待つていたと言わんばかりにニヤリと笑う。そして、先頭を切つているクワガタの様な仮面の戦士はバイクに跨りながら叫ぶ。

「大ショッカー！お前たちの好きにはさせない！」

「ふんっ！貴様らごときが我等に勝てると思つてはいるのか…愚かな！」

アポロガイストは両手を広げ「いでよ！」と叫ぶと回りに銀色のオーロラが現れてその中からまた大量のショッカー戦闘員や怪人たちが出てきた。

「どうだ！これでも貴様らは我等に勝てると言うのか！」

怪人たちの数は明らかに仮面の戦士たちの数を圧倒していた。

しかし、戦士たちは誰ひとり諦めようとはしない。

「それがどうした！」「俺たちは決して悪には屈しない！」「最後まで戦い続ける！」

「それが俺たち『仮面ライダー』だ！」

そう、彼等こそ今まで地球の平和を守り続けてきた『仮面ライダー』である。

「いくぞ！」

「「「オーーー！」」」

数百人の仮面ライダーは地球を守るため大ショッカーに向かつて行く。

「哀れな！力の差を思い知れ！」

大ショックカーもそれに受けて立つと言つたように仮面ライダー達に向かつて行つた。

「はつ！」

「おらつー！」

「「「イー！」」

キバはザンバットソードを、ブレイドはブレイラウザーで相手を切り倒す。

『STRIK EVENT』

「はー…はつ！」

「「グオオー！」」

仮面ライダー龍騎は右腕に装填されたドラグクロールから火炎弾を放つ。

『CLOCK UP』

仮面ライダークブトは高速の世界に入り田にも留まらぬ速さで敵を倒していく。

「行くぜ、行くぜ、行くぜー！」

仮面ライダー電王はただひたすらテンガッシュジャーを振り回し暴れまくつていた。その他のライダー達も自分のもてる力の全てを發揮し戦つている。

そして、この戦いはライダー側が数で圧倒されていたにも拘わらず少しづつ押してきていた。

「くつ、多いな…」

仮面ライダークウガこと“五代雄介”は気がつけば怪人達に囲まれていた。

「「グオオー！」」

怪人たちがクウガに襲い掛からうとしたとき、

「はー！」

「ウエーイ！」

助けに入ったキバとブレイドが怪人たちを切り付ける。

「五代さん、油断するなー押しているとはいえた敵はまだまだいるんだ！」

「ゴメン、助かったよ剣崎君。」

仮面ライダーブレイドこと“剣崎一真”に礼を言つクウガ。

「ですが何か変です…」

仮面ライダー・キバこと“紅渡”は今の状況に納得がいっていなかつた。

「確かに今僕等は少しづつではありますが確実に押してきています。でも、数は明らかに向こうの方が多い。敵だつて馬鹿じゃないんだからその数を活かした策を使つてもいいのにそんな様子は全くなく、ただ僕等の相手をしているだけ。何か“裏”があるよつて思えてなりません。」

「“裏”か…」

キバの考えに少し考えるクウガ。

「渡君、ちょっとこの場を任せてもいいかな？俺は少し別行動をとる。」「別に構いませんが、一体何を？」

「とにかくよろしく！」

クウガが親指をたてサムズアップをし、走り出した。「おい、五代さん！」

ブレイドが叫ぶがクウガは怪人達のかたまりに消えていった。

「何をする気何でしょう？」

「さーな。だが俺はあの人を信じる。今はこっちに集中するんで。」

ブレイドはブレイラウザーを構える。

「ふつ、そうですか。ではもう僕達で片付けてしまいましょう。」

キバもザンバットソードを構えブレイドと並ぶ。

「よし、行くぞ！」

「ええ」

「うおおおー！」

ブレイドとキバは一斉に怪人達に向かつていった。

『スキヤニングチャージ』仮面ライダー オーズこと火野映司は持っていたメダジャリバーをオースキヤナーでスキヤニングチャージしする。

「はー…セイヤー！」

「ガー…！」

掛け声と同時にメダジャリバーを振り下ろし敵の怪人達に斬撃を放つ。

「よし、あと少しでこの戦いも…！」

ある方向を見るとオーズは驚いた。

「ひ、左さん！ フィリップさん！」

オーズは近くで戦っていた仮面ライダーダブル、左翔太朗とフィリップに駆け寄る。

「おい、火野！ 今戦いの最中だ！ 集中しろ！」

「いいからあれ見て下さい！」

オーズがある方向を指差す。

「あん？」

ダブルも怪人などめの一発をいれたあとオーズの指差す方向を見る。

そこにはロープに身を包み顔を面で隠した男が立っていた。オーズもダブルも初めて見る人物だったが後ろに複数の怪人達を従わせていることからあれがだれなのかすぐに察した。

「おい、フィリップ。あれ…」

『ああ、間違いない翔太朗。まさか敵の根源が直々にお出ましとは

…』

「ショッカー大首領…」

ロープに身を包んだその人物こそ大ショッカーを束ねる『ショッカー

「大首領』である。

大首領の存在に気づいた他のライダー達のほとんどは「チャンスだ！」、「あいつを倒せば全部終わる！」と考えていた。しかしキバは、「やはりおかしい…」と呟いた。

「今ライダー側が押しているこの状況で大首領が出て来るなんて狙つてくれと言つていいようなものです。」

「お前がさつき言つていた“裏”つてやつか…」

キバは頭の中で状況を整理しつつ考えていた。

（第一なぜ敵はこの世界を襲つたんだ…？この世界を襲撃すれば全ライダーが集まることがぐらいわかつていたはず…。世界征服をしたいなら邪魔は少ない方がいいはずなのに…。またはあえて集めたのか？もしそうなら奴らの目的はこの世界の征服ではなく全ライダーを集めること？いや、集める意味がわからない。僕達を集めたところで何がが手に入るわけでは……まさか…）

キバは一つの結論に達した。

「よし、大首領を倒すぞ！」「　「　「おー」

周りのライダーが大首領に向かつて行く。

「行つては行けない！」

キバが叫んでライダー達を止めようとする。しかし、ときすでに遅し…「掛かつたな…」

大首領はニヤリと笑い両手を前にかざした。

それと同時に周りにいた怪人達が一斉に引いていった。

「な、何だ！なぜ引いて行く！」

訳がわからぬライダー達。

するどライダー達の立つている場所に大きな魔法陣が現れ光り出した。そしてライダー達の体が光りに包まれる。

「な、なんだこれは！」

「か、体が！」

周りの光りのせいで視界がよく見えない。

そしてすぐに光りはおさまった。しかしライダーたちは自分達の姿

を見て驚きを隠せなかつた。

「馬鹿な！」

「！」「これはどういう事だ」「変身が…解けている」
そういう場にいる全てのライダーの変身が解けていたのだ。

「だったらもう一度変身しよう！」

“津上翔一”は再びアギトに変身しようとポーズをとるが、
「そんな…ベルトがでない」アギトに変身するためのベルトが現れないのだ。

“乾巧”もファイズドライバーにファイズフォンを挿入するも、
「どうなつてやがる…反応しねえ！」

ほかのライダーも変身しようと試みるもやはり変身出来ない。

「ハツハツハツハツハツ！」近くにいる大首領が大声で笑いだす。
「見事に掛かつてくれたな仮面ライダー！」

「て、てめえ…何しやがつた！」

乾が大首領に問う。

「なに、貴様らライダーの力を頂いただけだ。」

大首領は右腕をあげるとその手の上には複数のメダルが浮いていた。

「これが何か判るか、ライダー諸君？」

大首領が馬鹿にしたような口調で問う。

「コアメダル？」

映司は呟く。たしかにそのメダルは映司がオーブに変身する際に使用するコアメダルと酷似していた。

「これはライダーメダル。貴様らがライダーに変身するための言わば力の源だ。」

大首領の言葉に渡は唇を噛む。

「嵌められましたね…。」

「渡！どういうことだ！」

訳がわからぬ剣崎は渡に問う。

「つまり、この戦い自体が罠だったって事です…。」

「何…？」

「ハツハツハツ！」

大首領が再び笑いだす。

「その通りだ！我等大ショックカーの全戦力をもつて地球を攻めれば必ず全ての世界の仮面ライダーが集まるとふみこの世界を攻めた。そして思い通り貴様らは集まつてくれた。まさか、これ程上手くいくとは思わなかつたがな！ハツハツハツ！」

「くつ！ 教えろ！ お前らはそのライダーメダルをどうするつもりだ。」

剣崎が叫ぶ。

「本来、ライダーの力は何かを守る力。しかしその力を逆に使えば

『何かを破壊する力』として使えるのだ。」

「何！ それはどういづ…」

「話は終わりだ。」

大首領は合図をだすと先ほど引いていた怪人たちが再び現れる。

「思えば今まで我等は貴様らライダーに邪魔され続けてきた…だからそれも今日までだ！ 今日この日をもつて仮面ライダーは終結するのだ！」

大首領が怪人たちに『攻撃せよ』という命令を下そうとしたその時、

「ハツ！」

「何！」

大首領は背後からいきなり現れたクウガに背中から脇を通して掴まれた。

「五代さん！」

「クウガ！」

剣崎と大首領は驚きの声を上げる。

「なぜお前だけ変身を解除されていない！？」

「お前達がこいつことを考えていたのは何と無く予想してたんだ。だから俺は一人別行動をとり、お前が現れるのを待つていた。そして隙をうがつてたんだ。でも、まさか全員がライダーの力を失うとは思わなかつたけどね。」

「おのれ！」

大首領はクウガを振り払おうとするがクウガは決して手を離さうとはしなかった。

「今この状況で戦えるのは俺だけ…。俺一人でお前達全員を相手にすることは出来ない。だからお前達を時空間に閉じ込める！」

「何という事だ！？」

その言葉の意味は仲間であるライダーたちにもわからなかつた。しかし、渡だけは、

「まさか五代さん…自分を道連れに…」

「道連れだと！」

剣崎が渡の胸倉を掴んで問い詰める。

「道連れとはどういう事だ！説明しろ渡！」

「…おそらく五代さんは自分の力を全て使って時空間に穴をあけ自分で「ごと奴らをその中に閉じ込めようとしてるんです…」

「何！」

剣崎は五代に向かつて叫ぶ。

「やめろ五代さん！そんなことをすれば…」

「大丈夫だよ」

五代は仮面の中で笑顔をつくる。

「俺の夢は世界中のの人達を笑顔にすること。だからその人達のためなら俺は何だつて出来る！」クウガは大首領を掴む手を強める。

「や、やめろ！」

大首領は最後まで抵抗するが、

「ハ――！」

クウガの体が光りだす。

「五代さん！」

剣崎が叫ぶ。

「剣崎君…あとはよろしく…」

そして辺りに光が広がり思わず目を閉じる。

「うおおおお――！」

そして少しすると光がおさまった。ゆっくりと目を開けるとそこにはクウガも大首領も周りにいた怪人達も消えていた。

「そんな…」

剣崎は膝から崩れ落ちる。「こんな終わり方つてありかよ…」

剣崎は地面に拳を叩き突ける。

「剣崎さん…」

渡は剣崎の肩に手をポンつと置き

「五代さんは世界を救おうとしました。自分を犠牲にしてまで…。だから残された僕等が五代さんの分まで世界を…守りましょ…」

「渡…」

剣崎は立ち上がった。

「ああ、守り続けよう! あの人分まで!」

こつして戦いはライダーに変身する力と仮面ライダークウガ“五代雄介”を失うというかたちで終結した。これが後に言つ『ライダー大戦』である。

だが、この『ライダー大戦』は数年後に起きる出来事のまだ“始まり”にすぎなかつた。

プロローグ（後書き）

駄文だった…。やっぱり小説って難しい！みんなどうやって書いてるんだろう。もし何かアドバイスなどがある人は是非コメントをお願いします！

批判などは勘弁して下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0504z/>

フォーゼ・オーズ・ゴーカイジャーfeatゴセイジャー オールヒーロー大決戦

2011年12月1日22時50分発行